

『義経記』  
卷七の改竄統貂―  
『義経記』  
卷七を中心に―

田  
村  
俊  
介

富山大学人文学部紀要第67号  
2017年8月  
抜刷

# 『義経記』 卷七の改竄続紹―『義経記』 卷七を中心に―

田 村 俊 介

## 序

佐藤陸氏は「『義経記』 卷七の改竄」<sup>1</sup>に於いて、「義経記」卷七は、第一系列本のほうが第二系列本よりも優秀で、後者は、前者の本文を改竄・削除して成立したものであることを明らかにしている（以下、本拙稿に於いて、佐藤陸氏の説を引用する場合、特に断らない場合、この論文に拠る）。これを受けて、私も、第一系列本の優秀性を示す根拠を私なりに付け加えてみたい。

両系列の本文を対照させるにあたっては、佐藤氏に倣って、橘本で第一系列を代表させ、田中本で第二系列を代表させる。田中本は、周知の通り、小学館発行日本古典文学全集（以下、全集と略称することもある）『義経記』<sup>2</sup>及び同社発行新編日本古典文学全集（以下、新全集と略称することもある）『義経記』<sup>3</sup>の底本である。一方、岩波書店発行日本古典文学大系（以下、大系と略称することがある）『義経記』<sup>4</sup>の底本は国会図書館支部東洋文庫蔵十二行本活字本であるが、これは第一系列本である。従って、橘本の本文を釈文に直す際、解釈する際にも、大いに参照させて頂く。橘本の引用は『判官物語』（影印本）<sup>5</sup>、田中本の引用は高橋貞一氏編著『田中本義経記と研究』<sup>6</sup>に拠る。

本拙稿の主要テーマとする段落以外の段落を引用する際には、卷七の場合、第一系列本、卷一から卷六、卷八については、第二系列本を優先する方針を立てた<sup>7</sup>。（もともと、そのような方針を立てただけであって、実際に八つの巻の全てから引用したわけではないのであるが）

# 一 越中から越後へ

山伏集団に扮した義経一行が、越中の黒部を出た後の道のりは、次のように記されている。

## 【橋本】

くろへ四十八かせと申かハをこえミやさきにつき給ふいちふりしやうとのうたのわきかんはらなかしりなといふところをとりていはとのさきといふ所につゐてあまのとまやにやとをかりて夜と、もに御ものかたりありけるにうらのものともわかめかちめといふものをつきけるを見給ひてきたのかたかくそおもひつゝけ給ひける

よものうみなみのよる／＼きつれともいまそはしめてうきめをハ見る  
むさしはう是を聞いていま／＼しくおもひけれハ

うらのみちなミのよる／＼きつれとも今そはしめてよきめハ見る

かくていはとのさきをもいて給ひてゑちこのこうなをいの津はなそのゝくわんおんたうといふ所につき給ふこのほんそんと申ハ八まんとのゝあへのさたたうをせめ給ひし時ほんこくの御きたうの為になをいの二郎といひけるうとくのものにおほせつけて三十りやうのよろひをたひてこんりうしたまひしけんしちうたひの御ほんそんなりければその夜ハそれにて夜もすから御きねむあり  
(六六七～六六九頁)

## 【国会図書館支部東洋文庫蔵十二行木活字本を底本とした大系『義経記』の釈文】

黒部四十八箇瀬の渡りを越え、市振、浄土、歌の脇、寒原、なかはしといふところを通りて、岩戸の埼といふところに著きて、海人の苦屋に宿を借りて、夜と共に御物語ありけるに、浦の者ども、搦布といふものを潜きけるを見給ひて、北の方かくぞ續け給ひける。

四方の海浪の寄る／＼來つれどもいまぞ初めてうきめをば見る

弁慶これを聞きて、忌々しくぞ思ひければ、かくぞ續け申（し）ける。

浦の道浪の寄るく來つれどもいまぞ初めてよきめをは見る

かくて岩戸の崎をも出で給ひて、越後國の府、直江津花園の觀音堂といふところに著き給ふ。この本尊と申（す）は、八幡殿安倍の貞任を攻め給ひし時、本國の御祈禱の爲に直江次郎と申（し）ける有徳の者に仰せつけて、三十領の鎧を賜ひて、建立し給ひし源氏重代の御本尊なりければ、その夜はそれにて夜もすがら御祈念ありけり。（三四二―三四三頁）

両者を比較してみると、橘本、弁慶の詠歌の第五句「よきめハ見る」は字足らずにもなるし、明らかに誤写であるが、親知らず地域の地名の列挙「しやうとのうたのわかかなはりなといふところをとりて」は、大系「浄土、歌の脇、寒原、なかはしといふところを通りて」と比較すると、「しやうと」の下に不注意で「の」が入り込んでしまったといふものの、「なかはしり」は「なかはし」よりも原初的な形態だと思われる。大系注では、

不明。親不知の北か、長浜という地が直江津の西にある、そこか。

とある。一方、「なかはしり」という地名を確認できたわけではないが、親知らず地域には道がなくとも、幾つかの穴のような小さな陸地がある、旅人はその穴に留まつていて、十枚の波のうち二、三枚は小さい、その小さな波の時に急いで、次の穴まで移動するという旅の仕方をしていたという伝承がある。日本各地の伝承を集めて小説にも盛り込むことを常とした泉鏡花の「海戦の餘波」（明治二七年）が参考になる。

去にし月父なる松枝海軍中尉が戦艦に乘組みて、行方見果ぬ海の外に遠き船出をなせし後、一子千代太は慈愛深き母親に伴はれて、その故郷の越後に歸れり。

#### （略）

「千代太や、今日だけはおやめなさい。誰も濱へは出ないから。」

と母は其日も風雨を冒して出行かむとする千代太を留めぬ。

母の命令は何事も背けること無き童なりしが、如何なしけむ此時ばかりは、  
「否、浪の來る處までは参りません。」と涼しき眼に母を見て、心の不服を訴へ顔なり。

母はなほ危みて、

「でもね、何時何様な高浪が天窓へ冠つて、足を攫はうも知れません。此邊は遠浅で不斷浪が荒いのですもの。豫て聞いては居ようけれど此濱續きで親不知といふ難所があるがね、其渚を傳ふ旅人は、一つ來て次の浪が來ない内に、断崖の洞穴の中に隠れないと、直に海の中へ引かれてしまひます。其處は神様の御方便で、ちゃんと人を助ける爲に、左様いふ岩洞を拵へて置いて下さるけれど、此邊は平生其様でないから、それこそ浪に取られる時、捉まる櫓もありません。……」(三二八―三三〇頁)<sup>8</sup>

その、一つの洞穴からもう一つの洞穴まで走って移動する距離が長いために「長走り」という地名が出来たのであろう。従つて、橋本の本文が古態を保ち、国会図書館支部東洋文庫蔵十二行木活字本は「り」を脱字したものと思われる。

さて、第一系列諸本がこのようになってゐる箇所、第二系列本は、

#### 【田中本】

六だうじの夜、いかせのわたり、みやさき、いわとのさきといふうらにつきて、あまのとまやに宿をかり、わかめなどとりてかへるを御覧して、北の御方、

四方のうみなみのよる／＼きつれどもいまぞはじめてうきめをばみる

とあそばしければ、弁慶、いまはしくおもひて、

わだつみのなみのよる／＼きつれども今ぞはじめてよきめをば見る

となをし、いはとのさきをもたち給ひて、越後の国へ出、花ぞの、くはんをんだうをおがみ給ふ。このくはんをんだうは、あべのさだたうせめ給ひしとき、御きたうのために三十りやうのよろひをたびてこんりうし給ふ御堂なり。

であるが、この田中本を底本とした新全集の積文は、次の通りである。

六道寺の夜、いかせの渡り、宮崎の岩戸の埼といふ浦に着きて、海人の苫屋に宿を借り、若布などを採りて帰るを御覧して、北の御方、

四方の海浪のよるよる來つれども今ぞ初めて憂き目をば見る

と遊ばしければ、弁慶、忌まはしく思ひて、

わだつうみの浪のよる来つれども今ぞ初めてよき目をば見る

と直し、岩戸の崎をも発ち給ひて、越後の国へ出で、花園の観音堂を伏し拝み給ふ。この観音堂は、安倍貞任攻め給ひし時、御祈禱の為に三十領の鎧を賜ひて建立し給ふ御堂なり。

即ち、新全集は底本の「みやさき、いわとのさきといふうらにつきて、」の「みやさき」の下に「の」を補い、「宮崎（という地域の中）の岩戸の埼といふ浦」の意にしている。この後、「越後の国へ」出た、（今で言う、新潟県に入った、）という記述がある以上、岩戸の埼は、越中（今で言う、富山県）の中になければならず、だとすれば、越中最東の村である宮崎（今で言う、朝日町宮崎）の中にある、と考えるのは、一応、妥当である。ところが、新全集の下段訳は、

……宮崎を経て、岩戸の埼という浦に着き、……

である。中段の釈文「AのBに着きて」を、下段で「Aを経て、Bに着き」と訳すのは明らかな誤訳ではないか。新全集の校注者は「宮崎」が「越中国下新川郡三位郷宮崎、」（頭注四の前半）であり、「岩戸の埼といふ浦」が「新潟県上越市居多付近の海浜。」（頭注五）であることがわかっていたから、それに基づいて訳を作ったのであろう。しかし、いったん、「宮崎の岩戸の埼といふ浦に着きて」という釈文を立てた以上、訳は「宮崎という地域の中の岩戸の埼という浦に着き、」でなければならぬ。

それはそれとして、たしかに、私がJR越中宮崎駅に降り立って調べた（今で言う、あいの風とやま鉄道越中宮崎駅。但し、私が降り立った時点では、JR）ところ、「岩戸の埼」やそれに類する地名はなかった。その一方、JR直江津駅に降り立って調べた（今で言う、えちごトキめき鉄道直江津駅。但し、私が降り立った時点ではJR）ところ、直江津中心部のやや西に「虫生岩戸」という道路標識があった。そして、「虫生岩戸」からJR直江津駅を含む直江津中心部までは穏やかな浜辺が続いていた。「岩戸の埼」とは、この「虫生岩戸」のことであろう。大系の三四三頁頭注一二の前半に「越後国中頸城郡居田（小田）浜の岩戸埼、直江津の東」とあるのは間違いないである。

更に、両系列の優劣がはっきりするのは、「花園の観音堂」の説明の部分である。

第一系列の橋本は、

このほんそんと申ハ八まんと、あへのさたうをせめ給ひし時ほんこくの御きたうの為になをいの二郎といひけるうとくのもの  
におほせつけて三十りやうのよろひをたひてこんりうしたまひしけんしちうたひの御ほんそなりければ

であり、第二系列の田中本は

このくはんをんだうは、あべのさだたうせめ給ひしとき、御きたうのために三十りやうのよろひをたびてこんりうし給ふ御堂なり。  
である。敵である安倍貞任は同様に記されているが、主語である八幡殿（＝源義家）が第二系列には抜け落ちてゐる。しかし、尊敬すべき源氏の先祖である源義家が建立した観音堂だからこそ、源義経やその家来たちが祈祷したのである。

## 二 亀割山周辺の地理について

第一系列の橋本は、最上川から亀割山までの義経主従の旅の様子が詳細に描かれている。その点に就き、佐藤氏の解説を引用したい。

第一系列の傍線部分（清川周辺から「さきのふのにいた」までの記述——田村注）は、「清川」に着いた判官一行が、「五所王子」で通夜して、翌朝舟で最上川をさかのぼり、途中「白糸の滝」「鎧の明神」「兜の明神」「高屋の瀬」「みるたから」「たけくらべのすぎ」「矢向の大明神」を眺めて「合川の津」に着き、ここで、南下して「宮城野の原」「つつじが岡」「千賀の塩釜」をたずねるべきか、「亀割山」を越えて、「室の里」「姉羽の松」へ出るべきかと迷うが、日程を三日短縮できるからというので、「亀割山」経由をえらぶことにして、その夜は「さきのふのにいた」に宿泊するというのである。千字にも及ぶ長文である。その中に出てくる地名の多くは現存していて、道順もいたって順当である。ことに、最上川沿岸の地理の叙述は詳細・正確で、この地を実際に旅した体験が踏まえてゐるのではないかというような憶測さえ抱かされるほどである。「さきのふのにいた」は、流布本に省かれてゐる地名だが、『塩釜大明神の御本地』に、女主人公のさわらび姫が、流離の果て鮭延郡亀割山に至った由を述べてゐる。また亀割山北麓に発して本合海（昔の「合川の津」）に注ぐ新田川なる川がある。これらのことから、「さきのふのにいた」とは、すなわち「鮭延の新田」であらうと思われる。



このように、第一系列本は描写が詳細で現存する地名も多く出て来て、かつ、道順もいたって順当であるが、第二系列本は簡略である。以下、第二系列本の本文の引用も、佐藤氏が引用したものを再引用する。圏点も佐藤氏に拠るものである。次いで、それに対する佐藤氏の解説も引用する。

はぐろ山をよそよりおがみ給ふにも、御参籠の御こゝろざしはありけれども、北の御方御さんのことすでにこの月なれば、よろづをそれをなして、弁慶ばかり御代にぞまいりける。さてせなみ山、ちかの塩がま、松嶋、あねはの松御らんじて、かめはり山にか、りたまへば、にはかに御さんの御心ちあり。十郎権のかみ心ぐるしくて（田中本下一一頁）

第二系列本では、この長い傍線部分（第一系列本の、清川周辺から「さきのふのにいた」までの記述——田村注）が、ひとつのまとまりを成したままで、完全に欠落している。そしてその代りに、圏点を付した二十字余りの短文「さてせなみ山、ちかの塩がま、松嶋、あねはの松御らんじて」が存している。しかし、この短文はおよそ荒唐無稽なものである。「せなみ山」は架空の地名であろう。「羽黒山」の麓からにわか「千賀の塩釜」にやってくるのからして腑に落ちないが、さらに奇怪なのは、「千賀の塩釜」「松島」「姉齒の松」など陸奥の国の名所を御覧した上で、出羽の国の「亀割山」にかかったとしてることであろう。もしこの通りならば、平泉に近い姉齒の松から、山また山の悪路をわざわざ二十里もまわり道して亀割山頂にいたり、そこで不自由きわまる出産をすませ、ふたたび平泉めざして取ってかえすということになる。

やはり、傍線部分を削除した痕跡をかくすために、思いつきの地名を並べたまでのことと見るほかあるまい。耳慣れぬ地名を数多く含む長文をわずらわしく感じて、ひとまとめにして省略したのであろう。削除したまま放置したら、あるいは単なる誤記・落丁ということで見過されたかもしれないが、地理不案内にもかかわらず、なまじ短文補填というような小細工を弄したために、かえって矛盾を生じ、語るに落ちる結果になったわけである。

第二系列は、第一系列の穏当で無理のない本文に手を加え、このように改竄している。

第一系列、第二系列の優劣を決定するに足る解説である。



しかし、私は、第二系列本書写者の頭の中に、もう少し違う日本地図が描かれていた可能性も指摘したい。亀割山が姉羽の松と栗原のあいだにあるという地図である（栗原は、平泉の手前で、義経たちが滞在した地。ここで藤原秀衡と連絡を取り合い、やがて、平泉に向かった。その点に就いては、第一系列本でも第二系列本でも同じ）。第二系列本の書写者が、亀割山が出羽の最東北にあるという事実を認識していたら、出羽の最上川↓陸奥の姉齒の松↓出羽の亀割山↓陸奥の栗原、という順路が不自然であることに気付いたであろう。

いずれにせよ、第一系列本（の先祖）が地理的に正確なものであり、第二系列本は改竄した結果、矛盾が露呈してしまったという点は動かない。

### 三 会話文の範囲

京の都から北陸経由陸奥の国の平泉までの逃避行の第一の地点というべきは天津である。天津二郎は山伏集団を名乗る義経主従十数人を宿泊させる気になっていたが、二郎の妻の通報もあって、天津の街の第一権力者である山科左衛門の耳には、山伏集団は実は義経主従であるとの情報が入る。山科左衛門が義経捕縛に動くことは誰しも予想するところであり、天津二郎は、そもそも本当に義経主従なのか、それとも、やはり本人たちが言う通り山伏集団なのかわからぬまま、いずれにせよ義経主従と疑われている以上、宿泊を中止し夕方のうちに琵琶湖を北上したほうが良い、と十数人に勧める。その件りが、第一系列本では次の通りである。

#### 【橘本】

……きやくそうたちの御中に御ふねに心えさせ給ひて候、いそぎ御出候へと申けるへんけい申けるは身にあやまりたる事ハ候ねともさやうに所にわつらひ候んするにはとりをかれまいらせ候てハ日かすものひ候んすさ候、いとま申てとていて給ひければ（六〇七頁）

同じ第一系列本を底本とした大系の釈文は、

【国会図書館支部東洋文庫蔵十二行木活字本を底本とした大系『義経記』の釈文】

「……客僧達きやくそうたちの御中ごちゆうに船ふねに心得こころえさせ給ひて候はば、急いそぎ御出候へ」と申まを（し）ける。弁慶べんけい申まを（し）けるは、「身みに誤りたる事は候はねども、左様さように所ところに煩わづひ候はんずるには、取置とりおかれ候ひては、日數かずも延のび候はんず。さ候はば暇いとま申まを（し）て」とて出いで給ひければ、である。橋本も、大系の釈文の作り方に倣ならつて、釈文に直せば、

「……客僧たちの御中に御船に心得させ給ひて候はば、急ぎ御出で候へ」と申しける。弁慶、申しけるは、「身に誤りたることは候はねども、さやうに所にわづらひ候はむずるには、取り置かれ参らせ候はば、日數も延び候はむず。さ候はば、暇申して」とて、出で給ひければ、である。

この後、大津二郎は、琵琶湖西岸最北の港である海津在住の弟が災難に遭ったという嘘を用いて山科左衛門を言いくるめ、自分が船を漕いで海津まで連れて行つたのだが、この時点では、まだうまく山科左衛門を言いくるめることができるかどうか見通しが立たず、「十数人のうち、誰か一人ぐらゐは船を操る技術を持っている方がいらつしやるでしょう、その方が自分の船を漕いで海津まで行きなさい、（自分の船は海津に乗り捨てても構いません）」と助言する。船一艘失うことになるが、あなた方を助けることができれば、少し財産を失つても構わない、という心意気である。その言葉が、「客僧たちの御中に御船に心得させ給ひて候はば、急ぎ御出で候へ」である。弁慶の詞のうち、「身に誤りたることは候はねども、」は、自分たちは山伏集団であつて、義経という方とその家来たちではないのですが、の意。「さやうに所にわづらひ候はむずるには、」は、たとえ、濡れ衣であれ何であれ、自分たちを捕縛するための乱闘が起こるなどして、この土地の方々（特に大津二郎一家に）迷惑が掛かつては、の意である。しかし、この一節が直後の「取り置かれ参らせ候はば」とどうつながつていくのか、不明である。或いは、この一節が直後の「取り置かれ参らせ候はば、日數も延び候はむず。」とどうつながつて行くのか、不明である。そこで、つながりを良くするために「恐縮である」のような意の詞に改竄してしまったのが、第二系列本だと私は思うのである。

#### 【田中本】

……客僧さまの御中に舟にこゝろえさせ給て候はん御かたにこがせられ、いそぎ御落候へと申ければ、べんけい申けるは、身にあ

やまりは候はねども、左様に所のわづらひにもなり候はんには、もつたいなく候あひだ、さも候はゞいとま申てさらばとて、出たまひける。(八一頁)

## 【新全集】

「……客僧さまの御中に船に心得させ給ひて候はん御方に漕がせられ、急ぎ御落ち候へ」と申しければ、弁慶申しけるは、「身に誤りは候はねども、さ様に所の煩ひにもなり候はんには、勿体なく候ふ間、さも候はば暇申してさらば」とて出で給ひける。

ちなみに、新全集では「さ様に所の煩ひにもなり候はんには、」に注一七が施され「この土地の迷惑になるのでは、」「勿体なく候ふ間」には注一八が施され「恐縮なので。」と記されている。

しかし、ここで振り返って、第一系列本の本文をもう一度検討してみたい。弁慶の詞は「さやうに所にわづらひ候はむずるには、」までで終わりなのではないか。この一節を受けるのは「恐縮である」という内容、及び、「恐縮だから、夕方のうちに大津家を出て行く」という内容であるが両者は省略されたと考えたいのである。そして、「取置かれ候ひては、日数も延び候はんず。」からは、義経の詞なのではないか。我々が捕縛されても、義経という方ではないのだから、いざれ釈放されるであらう、しかし、その間何日か、大津に足止めされては目的地に着くのが遅れることになるから困る、と弁慶とは異なる理由で、夕方のうちに大津家を発つ意向を示したのである。そもそも、話し手が途中で変わらずと弁慶の言葉だとしたら、その詞が「とて、出で給ひければ」で結ばれるのが気にかかる。やはり、話し手が途中から、為手尊敬の敬語を用いられるにふさわしい人物に変わった、というほうが自然である。

以上の私見を釈文の形で示せば、

## 【橘本】

「……客僧たちの御中に御船に心得させ給ひて候はば、急ぎ御出で候へ」と申しける。弁慶、申しけるは、「身に誤りたることは候はねども、さやうに所にわづらひ候はむずるには。」「取り置かれ参らせ候はば、日数も延び候はむず。さ候はば、暇申して」とて、出で給ひければ、  
である。

※

このように、原型の会話文の範囲を書写者が見誤ったため、それでもつながりを良くしようとして改竄という手段に至ったというのは、軍記物語やその影響を受けた中世文学諸作品に、意外に多くあるのではなからうか。

『義経記』の中の他の例を挙げれば、巻四冒頭である。源頼朝の旗揚げを聞き付け、陸奥国の平泉に滞在していた義経が息せき切って、浮島が原まで駆けつけて来る、しかし、その駆けつけて来た青年が弟の義経であるとは頼朝はまだ知らないでいる。

#### 【田中本】

うき嶋が原になりにけり。九郎御ざうしは、兵衛の佐殿のぢんのまへに三ちやうばかりひきのきてちんをとり、しばらくいきをやすめられける。すけどのこれを見給ひて、こゝにしらはた白じるしにてきよげなるむしやの五六十騎ばかりにて、みえたるは、誰なるらん。おほつかなく候。しなのゝ人々は、きそにしたがひてとまりぬ。かひとのばらは二ぢんなり。いかなる人ぞ。ほんみやうじつみやうをたづねてまいれとて、ほりの弥太郎をつかひにて、おなじく家のこらうどうをぐそくしてまいる。(一一一頁)

#### 【田中本を底本とした新全集の釈文】

浮島が原になりにけり。九郎御曹司は、兵衛佐殿の陣の前に三町ばかり引き退きて陣を取り、暫く息を休められける。佐殿これを見給ひて、「此処に白旗、白印にて清げなる武者の五六十騎ばかりにて、見えたるは、誰なるらん。覚束なく候。信濃の人々は、木曾に従ひて留まりぬ。甲斐の殿ばらは二陣なり。いかなる人ぞ。本名、実名を尋ねて参れ」とて、堀弥太郎を使ひにて、同じく家の子郎等を具足して参る。

田中本の「かひとのばら」を新全集は「甲斐の殿ばら」と校訂しているのである（次に挙げる岩瀬文庫本も、「かい」の下に「の」がない点が田中本と同じい）が、「の」の有無は動き易いことでもあるし、妥当な処置であらう。

さて、第二系列は、岩瀬文庫が現存する巻四途中までは、同本も有力な資料に成る。佐藤陸氏も田中本の本文のままでは不自然であったり、文意不通の箇所が岩瀬文庫本では極めて自然で文意も明快に通じることがあるという趣旨のことを述べ、多くの例を挙げている<sup>9</sup>。今問題にしている巻四冒頭も、岩瀬文庫本現存の範囲に含まれているので、引用したい。

【岩瀬文庫本】

うきしまかはらにつきにけり御さうしハ兵衛のすけ殿のちんのまへ三ちやうはかりひきのきてちんをしはらくいきをそやすめられるすけ殿これを見給ひてこ、にしらはたしろしるしにてきよけなるむしやの五六十きハかりにて見えたるハたれなるらんおほつがなく候しなの、人々ハきそにしたかひてと、まりぬかいとのらはハこちんなりいかなる人そけミやうしちミやうをたつねてまいれとてほりのや太郎をつかひにておなしくいゑのこらうとうをくそくしてまいる<sup>10</sup>

このように、この箇所については、岩瀬文庫本と田中本のあいだにさしたる違いはないのであるが、解釈しにくいのが「覚束なく候。」である。新全集の頭注では「はつきりいたしません。」である。「候」という丁寧語（ここでは、終止形）が用いられていることを考慮すれば、そうせざるを得まい。しかし、下段訳では「どうもはつきりせぬ。」である。源頼朝が近くに居る家来たちに話した詞の一部であるということ考虑すれば、丁寧語を含んだ訳では不自然であり、そうせざるを得まい。

しかし、私見は違う。私見を釈文の形で示せば、

【田中本】

浮島が原になりにけり。九郎御曹司は、兵衛佐殿の陣の前に三町ばかり引き退きて陣を取り、暫く息を休められる。佐殿これを見給ひて、「此処に白旗、白印にて清けなる武者の五六十騎ばかりにて、見えたるは、誰なるらん」。「覚束なく候」。「信濃の人々は、木曾に従ひて留まりぬ。甲斐の殿はらは二陣なり。いかなる人ぞ。本名、実名を尋ねて参れ」とて、堀弥太郎を使ひにて、同じく家の子郎等を具足して参る。

のようになる。即ち、従来頼朝が自問自答していると解されてきた箇所を、頼朝がそばに居る従者の誰にもなく発した問いに、従者の一人が「覚束なく候」と答えた、と解したのである。そして、「信濃の人々」から、再び頼朝が口を開いたのである。

ところが、第一系列では、橋本は、

【橋本】

うきしまかはらにつきにけり九郎御さうしはひやうゑのすけ殿のちんにまへ三ちやうハかりひきのきてちんをとりしはらくいきを

そやすめられけるすけ殿これをミ給ひてこゝにしらはたしろしるしにてきよけなるむしやの五六十きハかりにてみえたるたれなるらんおほつかなく候しなのゝ人々ハきそにしたかひてとゝまりぬかいとのハラハ二ちんなりいかなる人そほんミやうしちミやうをたつねてまいれとてほりのいや太郎つかひにておなしくいへのこらうたうをくそくしてまいる

であるが、国会図書館支部東洋文庫蔵十二行本活字本では、

#### 【国会図書館支部東洋文庫蔵十二行本活字本を底本とした大系の積文】

九郎御曹司ごそうし浮島うきしまが原はらに著つき給ひ、兵衛べゐ佐殿の陣じんの前まへ三町さんちやうばかり引退ひきりぞいて、陣じんをとり、暫しばらく息いきをぞ休やすめられける。佐殿これを御覧ごらんじて「爰こゝに白旗しろはた白印じやくしんにて清きよげなる武者五六十騎きばかり見みえたるは、誰たれなるらん、覚束おぼつかなし。信濃しんのうの人々は木曾きそに隨したが（ひ）て止まりぬ。甲斐かいの殿原だんばらは二陣にじんなり。如何いかなる人ぞ。本名實名じつめいを尋たづねて参まゐれ」とて堀彌太郎ほりのや つか使つかひにつかはされ、家の子郎等あまた數多あまた引具ひきぐして参る。である。第一系列の国会図書館支部東洋文庫蔵十二行本活字本の書写者は、全体が頼朝の詞と判断し、それを前提に丁寧語の「候」があるのはおかしいという理由で削除してしまったのであろう。

#### 四 如意の渡りの場面とその後

本節と次節では、第一系列本のほうが第二系列本よりもいかに文学的に優れているかを論じることにした。

本節では、義経主従が越中国、庄川の西岸、高岡市伏木の如意の渡りの場面に注目したい。渡守である平権守は、自称羽黒山伏の讃岐坊が、山伏集団の新参者（加賀の白山から山伏集団に加わったことになっている）を扇で容赦なく叩くを見て、義経に忠実であることが知られている弁慶ならこんな事をするはずがないと思った、つまり芝居にだまされたのか、それとも、叩かれているのが義経であると言いつつまでも弁慶が叩き続ける、それはかわいそうで見ていられないからだまされたふりをしようと思ったのか、船に乗せ庄川の東岸、新湊市側（今で言う、射水市側）に渡すことにした。しかし、新湊市側に渡すに当たって、船賃を請求する。その後の箇所を含めて、第一系列本を示したい。

#### 【橘本を積文に直したもの】



かんどりは、前に乗せ奉りて申しけるは、「さらば、はや、船賃なしてこえ給へ」と言へば、「いつのならひに羽黒山伏の船賃成しけるぞ」と言ひければ、「日頃取りたる事はなけれども、御辺のあまり放逸におはすれば、取て渡さむずれ」とて船を押さへて出ださず。弁慶、「和殿、かやうに我らに当たれば、出羽の国へ一年二年のうちに來たらぬ事はよもあらじ、酒田の湊と言ふは、この幼き人の父、酒田二郎殿の領なり、只今当たり返さむずるものを」とぞ威しける。されども、權守、「何とも宣へ、船賃取らでえこそ渡すまじけれ」とて支へければ、弁慶、「いにしへ、取られたる例はなけれども、この僧、僻事したるに拠つて取らるるござんなれ。さらば、それ、賜ひ候へ」とて北の方の着給へる、帷の尋常なるを脱がせ奉りて、渡守にぞ取らせける。權守、是を取つて申しけるは、「法に任せて取りては候へども、あの御坊のいとほしければ、参らせむ」とて判官にぞ奉りける。武藏坊、是を見て、片岡が袖を引きて、「をこがましや。ただ我もそれと同じことぞ」とささやきける。

かくて六動寺を越えて、奈良の林をさして、歩み給ひけり。武藏坊、忘れむとすれど、忘られず。走り寄りて、判官の御袂に取り付き奉りて、声を立てて、泣く泣く申しけるは、「いつまで君を庇ひ参らせむとて、現在の主を打ち奉るぞ。冥顯の恐れも恐ろしや。八幡大菩薩も許し、納受し給へ」とて、さしもたけき弁慶が泣きければ、侍ども、皆、袂をぞ濡らしける。判官、泣く泣く、「これ、人のためならず」とて、いとど涙にぞ咽び給ひける。さてもかくて日も暮れければ、北の方、「三途川を渡るにこそ、着たる物をば剥がるるなれ。少しも違はぬ風情かな」とて、岩瀬の森にぞつき給ふ。(六六四―六六七頁)

これに対し、第二系列本では、

【田中本を釈文に直した新全集】

「さらば船賃出だして渡り候へ」と申しければ、弁慶、「何時の習ひに山伏の関船賃なす事やある」と言ひければ、「日頃取りたることはなけれども、余りに御坊の腹悪しく渡り候へば」と申す。弁慶、「か様に我らに当たれば、出羽の国へ今年明年にこの国の者越えぬ事はよもあらじ。坂田の渡りは、この幼き人の父、坂田次郎殿の知行なり。只今この返礼すべきものを」とぞ脅しける。余りに言ひ立てられて渡しけり。

かくて六道寺の渡りをして、弁慶判官殿の御袖を控へ、「何時まで君を庇ひ申さんとて、現在の御主を打ち奉りつるぞ。天の恐



れも恐ろしや。八幡大菩薩も許し御納受し給へ」とて、さしも猛き弁慶、さめざめと泣きけり。余の人々も涙を流しけり。である。両系列の本文を見比べると、

【想定その二】第一系列本が原型。第二系列本は、如意の渡りの場面で簡略化、弁慶号泣後の直前の北の方の発言を完全に削除。か、

【想定その二】第二系列本が原型。第一系列本は、如意の渡りの場面で文言を増幅、弁慶号泣後には、北の方の発言を付け加える。か、どちらかということになる。しかし、この辺りだけに注目するからこそ両方が考えられるのであって、巻七の他の箇所たちから、第一系列本のほうが原型に近いということが明らかにしているので、ひとまず、想定その二に拠って、論を進めたい。

そうすると、明らかに第二系列本の平権守が魅力を失うことになる。平権守は、それが山伏集団であれ、義経主従であれ、経済的に弱者であることは見抜いていたはずである。その経済的な弱者から、船賃を取り立てようとした。ところが、それが山伏集団の先達であれ、弁慶であれ、夜暗い所では身長三メートルにも見えてしまう男でしかめいかめしい形相をしたものに威され、その後も「あまりに言ひ立てられて」、船賃を取らぬまま新湊市側に渡してしまうのである。「強きを助け、弱きを挫く」の典型である。

第一系列本の平権守は、身長三メートルのいかめしい男の威しに屈服せず、船賃として北の方のきれいな着物を奪い取った後、優しい態度で、扇で叩かれうちひしがれている、村千鳥の服の男に返してあげる。まさしく、「強きを挫き弱気を助く」という越中人氣質（今で言う、富山県民の県民性）の象徴である。

更に、岩瀬の森の直前、北の方の詞は、弁慶の号泣に拠って湿っぽくなった、場の空気を換えるために放った、優れた冗談であると思う。北の方も、川を渡る直前に着物を剥ぎ取られた。その後、すぐに返してもらったから、三途の川を渡る者と違うというような事情は、どうせ冗談だから、考慮しなくてもいいのである。

このように、越中を舞台にする部分は、第一系列本でなくては、文学的魅力が失せてしまい、又、越中人氣質が不当に貶められてしまうことになる。佐藤氏も、「人柄の「こんのかみ」が登場して、好ましい挿話」<sup>12</sup>「……、助詞「て」をくりかえして、弁慶の急激な荒々しい動作を、躍動的にえがいている」<sup>13</sup>と、第一系列本の文学的な面白さを強調なさっており、私もまったくその通りだと思う

のであるが、本節では、やや別の角度から考察した。

## 五 愛発山の場面

本節で取り上げる、近江から越前へ向かう場面は、『義経記』の中で最も文学的に優れた箇所であろう。

まずは、第一系列本を引用したい。

【橋本を釈文に直したもの】

北の方、「あら、恐ろしの山や、これをば何山と言ふらむ」と問ひ給ひければ、判官、「これは、昔はあらしの山と申しけるが  
当時はあらちの山と申し候ふ」と仰せければ、「面白や。昔はあらしの山と言ひけるを、何とて、又、あらちの山とは名付けけむ」  
と宣へば、「この山は余りに岩石にて候ふ程に、東より都に上り、都より東へ下る者の足を踏み損じて血を流すあひだ、あら血山  
とは申しけるなり」と仰せられければ、武藏坊、これを聞きて、「あはれ、これ程跡が無きことを仰せ候ふ御ことは候はず。人の  
足より血を踏みたらせばとてあら血の山と申し候はむに、日本国の岩石ならむ山のあら血の山ならざらむ所は、よも、候はじ。こ  
の山の案内は弁慶こそよく知りて候へ」と申せば、判官、「それ程知りたらば、知らぬ義経に言はせむよりも、など疾くよりは申  
さざりけるぞ」。「弁慶、申し候はむとするところを君のさいぎりて仰せ候へば、いかで弁慶申し候ふべき。この山をあら血の山と  
申す事は、加賀の国に下白山に女体後の竜宮の宮とおはしまし候ひけるが志賀の都にして唐崎の明神に見え初められ参らせ給ひ  
て、年月を送り給ひけるに、懷妊、既にその月近く成り給ひしかば、同じくは、王子にてもおはしませ、我が国にて誕生あるべし」  
とて、加賀の国へ下り給ひける程に、この山の禪定にて、にはかに御腹の氣付き給ひけるを、明神、『御産、近付きたるにこそ』とて、  
御腰を抱き参らせ給ひたりければ、御産成りてけり。その時、産のあら血をこぼさせ給ひけるによつてこそあら血の山とは申し候  
へ。さてこそ、あらしの山、あら血の山の謂れ知られ候へ」と申しければ、判官、「義経はかくこそ知りたれ」とて笑ひ給ひ、(六  
一四〜六一六頁)

国会図書館支部東洋文庫蔵十二行木活字本を底本とした大系の釈文も、右とほとんど違いがない。即ち、第一系列の内部での異同はほ

とんだないということになる。

しかし、大系が「判官」義経もかくこそ知りたれ」とて笑ひ給ひけり」を「義経もこの話を聞いたので、あら血山の由来をこうだと知った。」と注している（頭注十）のは、いかがであろうか。

「知る」 プラス 助動詞「たり」は、「たり」の職能が存在・継続である場合は、「そんなこと、言われなくても、知っていたよ」という意味になり、文脈に拠っては、話題提供者に対して「俺が勝利した」という口吻を含むこともある。「たり」の職能が完了である場合は、「初耳だ。いいことを教えてくれてありがとう」という気持ちを伝える詞であり、話題提供者の博学を讃え、その勝利を認めることに成る。

そして私は、同じ場面の義経の詞「それ程知りたらば、知らぬ義経に言はせむよりも、など疾くよりは申さざりけるぞ」（橘本）、「それ程知りたらば、知らぬ義経に言はせむよりも、など疾くよりは申さぬぞ」（国会図書館支部東洋文庫蔵十二行木活字本を底本とした大系）の中に、「知る プラス 助動詞「たり」の用例があるのだから、それと同様に解釈すべきだと考える。「それ程知りたらば」の「たり」は明らかに存在・継続である。

勿論、義経は、弁慶に教えられる迄は愛発山の地名の由来は知らなかったのであるが、あくまで、冗談で、「そんなこと、言われなくても、知っていたよ」と言ったのである。「笑ふ」という動詞は、『義経記』であれ、他の作品であれ、さまざまなニュアンスを持つが、この「笑ひ給ひ」の「笑（ふ）」は、自分の発言が冗談であることを示すための単語だったのではなからうか。

巻五で弁慶が苦「笑ひ」をする場面があるのだが、その時も弁慶は、苦笑いをしながら冗談を言っている。

#### 【田中本を底本とした新全集の釈文】

武蔵坊一人残りて、判官の越え給へる所をば越えず、川上へ一段ばかり上りあがりて、岩角に降り積みたる雪を、長刀の柄にて打ち払ひ申しけるは、「これ程の山川を越えかねて、あの竹に取り付きて、かさりびしりと給ふこそ見苦しけれ。其処退き給へ。この川相違なく跳ね越えて見参に入らん」と申しければ、判官これを聞き給ひて、「義経を偏執するぞ。目なやりそ」と仰せられて、貫の緒の解けたるを、結ばんとて、兜の鍔を傾けておはしける時、「えいやえいや」と言ふ声ぞ聞こえける。相違なく向かひの岸

に飛び付きたりけるが、取り付きたる岩つつじを引き切りてぞ落ち入りける。水は速く、岩波に叩きかけたり。ただ流れ行く。判官これを御覧じて、「あはや仕損ずるは」と仰せられて、熊手を取り直し、川端に走り寄り、たぎりて通る総角に、ぐさと引つ掛け、「これ見よや」と仰せられければ、伊勢三郎つと寄りて、熊手の柄をむずと取る。判官差し覗きて見給へば、鎧着て人にすぐれたる大の法師を熊手にかけて、宙に引つ提げたりければ、水たたらたとしてぞ引き上げける。稀有の命生きて御前に苦笑ひしてぞ出で来る。

判官これを御覧じて、余りの憎さに、「いかによ、口の利きたるには似ざりけり」と仰せければ、「過ちは常の事、孔子のたはれと申す事候はずや」と狂言してぞ申しける。(二八四―二八五頁)

ここで弁慶の詞を額面通りに取ると、彼は自分を孔子と同じだと位置付けていることになる。吉野周辺の川を渡り損ねて、溺れかかり、危うく伊勢三郎に命を救われたくせに威張るような発言は、誠に鼻持ちならない。しかし、苦し紛れの冗談として受け止めれば、そうした気の置けない義経と義経家臣団との関係を伝えていて、読者も微笑ましく感じるのではなからうか。言うまでもなく、同じ年の梅雨明けの頃、出羽国の亀割山で北の方が出産をする、その際、妊婦の腰を抱くという産婆の仕事を男性がしおせた点でも山の頂上近くでの出産という点でも関連があるのであるが、この時既に北の方は妊娠に気づいており、夫の愛の力で無事出産を終えた逸話を披露してくれたことは義経も心から嬉しく思い、縁起良く感じたであろうが、素直に「いいことを教えてくれてありがとう」と言ってしまうては、かえって、他人行儀になってしまうのである。

愛発山の義経も、もし彼が学者だとしたら、他の人の論文や学会発表で教えられたことを恰も前から知っていたかのような顔をする、学者として最もいけない者だということに成ってしまうが、これは、あまりにも明らかに嘘だとわかる発言であるので、私はそれなりに優れた冗談として評価したい。負け惜しみを言う者は、普通、負け惜しみだとわからないように勝った者にあれこれ別の点で難癖を付けるものである。義経は、あまりにも明らかに負け惜しみと分かる形で負け惜しみを言っている。

この場面、第二系列本では、次のようである。

【田中本を底本とした新全集】

北の御方、「あら恐ろしの山中や、何処いづくと言ふぞ」と宣のたまへば、「此処ここをば愛発の山中」と仰せられければ、「面白おもしろや、古いにしへはあらしの山中と言ひけるぞ。今は何とて愛発の山中とは名づくらん」と宣へば、「この山は余りに難所あたふにて、東あづまより都のほへ上り、京より東へ下る者の、足を踏みじて血を流す故に、あら血の中山と呼び替へたり」と、判官宣へば、武蔵坊むさしぼう、「あはれ君は跡なき御事を仰せられ候ふものかな。人の足より血を垂らし候へばとて、あら血の中山と申し候はば、日本国の難所どもみなあら血の中山にて候はんや。弁慶べんけいこそよく存じ候へ」と申しければ、「それ程知りたらば、義経よしつねに言はせずして、など言はざるぞ」と宣へば、「さらば申し候はん」とて、「この山をあら血の中山と申す事は、加賀かがの国白山はくさんに女体にょたいの竜宮りゅうぐうとておはしましけるが、志賀しがの都にて、唐崎からさきの明神に見え初めさせ給ひて、十月とつきを送り給ふ程に、懷妊くたありて、すでにその月近くなりしかば、おなじくは王子にても姫宮にてもおはしませ、わが国にて誕生あるべしとて彼の国へ下り給ひけるを、明神「御産おんこしの近づきたるに」とて、御腰おんこしを抱いだき参らせたりければ、この山にてたやすく御産ありけり。その時御産のあら血をこぼさせ給ひたるによりて、あら血の中山と申すなり。さてこそあらしの山中、あら血の中山の謂いはれ知られ候へ」と申しければ、判官はうくはん「義経もかくとぞ知りたり」とて笑ひ給ひて、越前えちぜんの国へ入り給ふ。

両系列に大きな違いはない。この愛発山の場面に限定して言えば、新全集の欠陥は、第二系列本を底本にしたことではなく、やはり、「義経もかくとぞ知りたり」の「かくとぞ知りたり」を「そういうわけなのだ」と初めて知った、の意。」と注してしまった（頭注八）点にある。第二系列の本文でも、第一系列の本文と同様、義経弁慶主従の漫才のような応酬が、この場面の面白さである。ではあるが、どちらかと言えば、第一系列本のほうが激しい応酬なので、その分、面白味が勝っていると思うのである。

## 注

先行論文については、国文学研究資料館「国文学論文目録データベース」で、「義経記」「巻七」「本文」を検索ワードにして検索、ヒットしたものを読ませていただいた。検索日は、平成二九年二月十九日。

- 1 『義経記と後期軍記』（双文社出版、平成一二年）所収。
- 2 昭和四六年。
- 3 平成一二年。
- 4 昭和三四年。
- 5 古典研究会発行、昭和四一年。
- 6 未刊国文資料刊行会、昭和三四年。
- 7 例えば、佐藤氏『義経記と後期軍記』所収「『義経記』の岩瀬文庫本」などで、巻七以外の七つの巻では第二系列的本文を省略・誤脱せしめて、第一系列本が成立したという趣旨のことが述べられている。私自身が八つの巻を読むにつけても、巻一―巻六、巻八では第二系列本が、巻七では第一系列本が古態性が強いというのは常々実感しているところであり、心から佐藤氏の結論を支持したい。
- 8 『鏡花全集』第一巻、岩波書店、昭和一七年。
- 9 佐藤氏『義経記と後期軍記』所収「『義経記』の岩瀬文庫本」。
- 10 岩瀬文庫本の引用は、愛知県西尾市岩瀬文庫から取り寄せた「はう官物語」二冊目の複製（通行本で言うと、『義経記』巻三から巻四までに当たる。但し、岩瀬文庫本の場合、巻四の後ろの三分の一程が欠落）に拠る。
- 11 越中の権守に限らず、巻七で義経主従が通った道筋の人々は、義経主従だとうすうす気付いて、自分たちの地に長期滞在させるわけには行かないが、かと言って、迂闊に捕縛しようとしたり殺害したりするとそれも面倒だという心理だったのではないか、と思う。平権守も最終的には通過させる心づもりだったのではないか。しかし、最終的に、義経が東に進むことができたとしても、その前にあまりに痛い目に遭うのは、かわいそうだという気持ちになったのだと思う。
- 12 『義経記と後期軍記』七五頁。
- 13 『義経記と後期軍記』八〇―八一頁。

〔付記〕 複製の労を煩わせた西尾市岩瀬文庫御当局に心より御礼申し上げます。

〔平成二九年三月二九日提出〕